

《翻刻》

洛東遺芳館所蔵

井上市郎太夫正本『弘法大師出世之卷』

山 田 和 人

昭和五十八年六月から、洛東遺芳館（京都市東山区間屋町通五条下ル三丁目西橋町四七二）に所蔵されている演劇関係の板本を、同館長香川聖一氏の御好意により調査する機会を得、同志社大学の向井芳樹先生を中心にその書誌調査を行った。洛東遺芳館には、京都の豪商相原家に代々継承・保存されてきた多くの貴重な資料が所蔵

されており、そのコレクシヨンは質量ともにきわめてすぐれた価値を有するものである。そのコレクシヨンの中から、「明曆四仲秋吉旦^正屋太兵衛」の刊記をもつ西沢太兵衛板『源平軍論』、「延宝七^未本^正屋太兵衛」の刊記をもつ西沢太兵衛板『源平軍論』、「延宝八^庚年四月下旬」刊の鶴屋喜右衛門板『弘法大師出世之卷』、「延宝八^申年八月吉日」刊の鶴屋喜右衛門板『熊野権現開帳』の三本の古浄瑠璃が発見された。このうち、『源平軍論』と『熊野権現開帳』については、すでに翻刻・紹介をさせていただいた（拙稿・翻刻「洛東遺

井上市郎太夫正本『弘法大師出世之卷』

芳館本『源平軍論』△同志社国文学▽二十五号、「古浄瑠璃『熊野権現開帳』について」洛東遺芳館本の位置」△芸能史研究▽八十七号。

今回翻刻・紹介する『弘法大師出世之卷』は『国書総目録』にも載録されておらず、管見に入る限り、浄瑠璃関係の諸書にもその名を見出すことのできない希覓本である。本書は現存する古浄瑠璃の弘法大師物としては最古の正本であり、井上市郎太夫の現存する唯一の正本であると考えられる点において、とりわけ貴重な正本といえる。

なお、本書については、すでに、「井上市郎太夫正本『弘法大師出世之卷』について」と題して、『近世文芸』四十三号誌上で内容の概略を紹介し、若干の考察を加えている。

本書の翻刻に際し、資料の閲覧および翻刻・紹介を御快諾下さいました洛東遺芳館館長の香川聖一氏に深謝申し上げます。また、翻刻にあたり、とりわけ、阪口弘之氏、山根為雄氏には貴重な御示教を賜りました。資料の調査に際しては、向井芳樹先生をはじめ、小川嘉昭氏、鈴木一夫氏、友田博氏、山崎睦也氏の協力を得ました。記して感謝申し上げます。

解題

装幀 半紙本。縦二・八櫃×横一六・〇櫃。

表紙 表紙は破損が著しい。裏表紙は無地の消炭色で、原表紙かと思われる。

題簽

原題簽重郭。中央に「弘法大師」と大書し、その右側に「こうほうたいししゆつしやうのまき」、左側に「あこや御ぜんきやうらんの道行井上市良太夫直正本」と細書してある。題簽上部は界線から切除されている。下方には「二条通」正本屋「喜右衛門」と三行に板元を記す。

匣郭 単郭。縦一九・八櫃×横一四・八櫃。

内題 「弘法大師出世之巻」。上方に「第一」とある。

所屬 井上市良太夫。



段数 五段。「第一」第五」と、各段の初め上方に記す。
丁数 一六丁半。行数一八行。一行あたりの字数は約三十五字から五〇字程度。

板心 上方に「弘法」とあり(二、七丁目は欠、下方に「三十八」の丁付を付す。

挿絵 十頁分(見開四、片面二)。

一ウ・二オ、四ウ・五オ、七オ、九オ、一一ウ・一二オ、一四ウ・一五オ。

各図に次のような説明がついている。(説明が□で囲まれている場合は「」で、それ以外の場合は『』で示した。)

第一・二図(一ウ・二オ)「右」女ほう立くわけん「あこや御せんまい給ふ」「みしなのまへ」「めのと」「なをうぢふうふ」「左」「ふどう明王」「しやか如来」「文しゆ」「ふけん」「ちぎう」「あこや御ぜん廿三夜ヲまち給ふ」「八じゆん斗のらうそう」

第三・四図(四ウ・五オ)「右」あこや御せんにけ給ふ所「みたい所とめ給ふ所」「なをうち殿うたんと給ふ」「女ほう立とめ給ふ」「左」「あこやせんなき給ふ」「こんぞうわう」「しやう」わか君を「もちひ」かへり給ふ後ニ「こうほう大し」是也「こんそらうわうしやう」「とうしゆく若きみいたき」

第五図(七オ)「右」「むしやうの山」「しやうじかうはつかむ所也」「きんぎよく丸ざぜん」「まわう共しやうけヲなす」

第六図(九オ)「上」くうかいうさ八まん宮へさんけい」「第三番ハ六字とおがまれ給ふ」「南無阿弥陀仏」「大六天のまわうのていにみへ給ふ」「下」「みさき帰りおとろき給ふ」「くうかいおしへ給ふ」「なをうち殿さい」

第七・八図(一一ウ・一二オ)「右」「りきし」「しゆひんさい」「こ

「こんがう王」「しゆつしの大みやう」「左」「しゆひんかたより小しや出ル」「くうかいよりけん出ル」「くうかいたいり二而いのり」

「御門多いらんなさるゝ」「くけ大臣立」

第九・一〇図(十四ウ・十五オ)「右」「まいるの人々」「あこう御せんしやじんと成」「御てしたち」「在」「大師しめし給ふ」「大師のちき筆御かけ」「さたおき殿」「なをうちしやう仏有」「同きたの御方」

節譜

次に順に掲げる。

「おろし、ハル、地、大三重、地、三重、ふし、ふし、三重、ふし、なかし、ふし、ふし、ふし、三重、三重、三重、まひせめ(以上初段)、ふし、ふし、ふし、ふし、三重、ふし、ふし、三重、三重、三重、三重(以上二段目)、ふし、三重、三重、二人ハル引ふし、ふし下、地、下、地、こおくり、下、持上いろふし、いろ、上ケンシテ、ワキ二人イロ、おくりはる、地、下、ふしいろ、地、下、な□、下、れい、せんふし、引、地、引コトハシテ、ふし、引、ハル、あたる、二人、ふし、地イロ、もつ、下、いろかわり、ふし、下、うたいふし、すみよしふし、ふしかより、下、地、下、引取三重、引ふし、地、ひろいふし、ふしきん、さんかはり、地イロかん、いろかん地、引、下なかし、ゆり、いろ上、引かんいろ、ふし、ふし、ふし、三重、三重、ふし、ふし(以上四段目)、三重、三重、ふし、三重、ふし、三重(以上五段目)

刊記

終了表本文末に次のように記す。

延宝七巳 未四月下旬井上市良太夫直正本

板元

鶴屋喜右衛門

井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』

凡 例

一、仮名遣・濁点・句切点・繰り返しはすべて原本に従った。

一、漢字は現行の通行字体に改めた。

一、特殊な略体・草体などもおおむね現行の字体に改めた。

ハ・ミ↓は・み、オ↓より、オ↓菩薩、但し、廿・卅はそのままとし、斗は計に統一した。

一、原本の文字が損傷などにより判読不能の場合は□としたが、推定判読した文字は□に入れた。

一、明らかな誤りも原本通りとし、行間に「マ、」を付し、疑問箇所には行間に「カ」と付した。

一、改行は原本に従わず、適宜設けた。

第一 弘法大師出世之巻こうぼうたいししゆつしのおまじ

扱もそのうちそれみつきやうといふは二げうを立てしかも一さいをもよほすこゝに本てう四十九代のみかとかわりん天王のぎよう。ほうき五年甲寅のとしみなみにあたつてさぬきの国多度のこほりにたんしやうせるほさつ有のりのいみなはくうかいわせう登壇さんげの御なはへんじやうこんがう日本しんこんのかうそそう大そうじやうこうぼう大しのゆらひを尋ね奉るに其比さぬきの国のぢう人さいきの侍従なをうちとて。ゆみとり一人。おはします御せんぞを尋るに天津たちからおうのみことのみすへ。とよしまと申奉る是さいきのとをつおやのかみなり其ながれてうてきをたいし有さぬきの国を



第2図

第1図

給はり代々御しそんばんじやうし今なをうぢに至るまでゆたかにくらさせ給ひけりみだい所はあとのせうしやうみち国の御そくちよ也御子二人おはします一はあこやごせんと申御とし十六才たうだいぶそうのびじん也ことにやさしき御心わかのうらなみつぎせすもふかきことのはなさけしるげにたぐひなきふぜい也次はみさき御せんと申ようやく二才になり給ふ掇家をまもる侍にはいわたかけはしわけい其むらかたゝみつしいいなげの三郎其外さうでんのしよ侍日やのしゆつしひまもなく君をうやまひ奉るかのなを(一オ)
大三重
 氏のいせいの程うら山さるこそなかりけれ

挿絵第一図(一ウ)

挿絵第二図(二オ)

是は扱置。地其比みかとは太子あまたおはします中にも第一の太子山のべのしん王と申奉るはじひしんふかく殊に御はつめいにましますゆへくんしん是をおもんし奉りほうき四年三月十一日に春宮に立せ給ひはや御そくるのぎよいとぞ聞へける其時大納言さだをきのきやう仰られしは誠にめてたき御めくみやしからは御后をも相定られ然べく存候御さたいかぶとそうもん有みかとゑいかんあさからすとまかくもかたゝあひはからひ候へとのせんし也左大臣藤原のたまろこうしやく取なをしいつれもそうせらるゝのおもむき尤也此上はとうだい天下になをゑたるびじんをゑらんで御后に定め御そくゐの

折から入内なさしめ申さんおの／＼いかにと仰けりまんざの公卿こ
とばをそろへげにもよろしき御はからいやしかしゑいぶんになつし
たらん程のびじんのほまれあるかたはたれ成らんとぞひやうき有其
時きたをき仰けるはたれ／＼と申さんよりさぬきの国のぢう人さ
きの侍従なを氏がそくぢよあこやのまへこそ聞へ渡りしびじんにて
候と申さるゝ左大臣をはじめ誠にあこやのまへは聞及たるびしん也
是さいわい成べきをそうもん有みかとゑいふんまし／＼てつかいを
もつて其だん申つかはすへしとのせんしにて則師（ついで）のさいしやうまさ
村にちよくしを仰付らるればまさ村せんしをかうふりちよくとう申
御前（三重）を立さぬきの国へそ下らるゝ

是は扱置あこや御せんはうつりかはれるよの中の常なきことをかな
しみてあけくれごしやうぼだいのつとめぎぜんくどくの折からにも
又すてられぬしき島の道にはせきもなき物をとわ思へ共いにしへの
其哥人に心はぢあはれゆかしきもの上我はいやしきかゝるのひなに
生を多てさくころ人もしらぬ花のこのまゝちらんくちおしやと（か）た
はふれ給ふぞやさしけれある日女房達を召れ扱もみつからはうつゝ
なく月日をお（二ウ）くり心なぐさむ方もなし何とぞけうをよほ
せんなふ方きとぞ仰ける女房達承はりけに御（こ）とはりにせんし
ふらうされはせじやうのなぐさみは月花とこそ申なれさいわひや
うぶ浦の山くにさきみたれたる花の色詠め多ならぬよし御はらしの

為御いもや候らんと皆（ふし）一とうにぞ申さるゝめのと是を聞よりもこ
は何事そおこかましやたとへいかやうの御事有共た所へ出させ給は
んとは思ひよらぬ御こと也女房達をめしよせられうたひなくさみ給
ひなは花みにまされる御ゆふけうは御へやにても有べきぞや姫君様
とぞ申さるゝあこやうれしく思召其きならはいつれも此むねあひ心
へ思ひ／＼によりいあれ我はたくみしことあれはまなひてけうをな
すべきそと姫君したくましませば女房達は打ましはりおの／＼やく
きをあひとゝのへすで（三重）にくわけんぞはしまれる

心もことばも及はれぬしちくりよりつの数々にはのなみ木も枝を
たれそらとふ鳥もはをやすめみすもきちやうもさゝめきてかんにた
へたる計也然る折ふし姫君はさもぎよらかにたち出て色よきあふき
をくれなるのいとかけあふきめさぬかあふきめせ其色しなをわけ
申さんめせや／＼とけう給ふ女房たちの其中にみしなのまへは立出
てこはめつらしき御いで達さあらはわらはがうり申さん其しな／＼
をうり給へ心へたりと姫君はかれうひんがの声を上おもしろや御よ
はゆたかにたみやすくめでたきときにあふぎこそ折を多たりとまひ
あふぎ（ふし）ゑん所にかぜをもとむなる上らう達たしなみにめされ候へそ
であふぎおほきもやうの数々にかざすたもともにほふなるむめの立
ゑたにうぐひず（うし）のさへつる声に桜花すなごにかすむすみゑにはしみ
づなかるゝ谷のとにくいな鳥のはをやすめやまのをくにもしかの

ねにつまこひかねてなくにこそあきのあはれをもよふせりふゆはしぐれにぬれさぎのゆきふり(三才)うつむ其ふぜいきよのこすへも白たへに花かとぞみる枝にこそ風のぶきくるたひことにはつとちう（た）こ有様はどうもいはれぬおもしろやぎよいにまかせてめされよとにつこと多め（なかし）かははせはたとへていわん方もなし直氏ふうふの人々も物のひまより御らんしてあこかれ立出給ひつゝ（ふし）ともけけろぞもよはざる

かゝりける所に師のさいしやう政村は多度のこほりに付せ給ひ直氏たちに（た）ちこへあんないこうて入せ給ひちよくしのよしをのべ給へば直氏たいゑつあさからずしていかやうのせんしをなしくださせられ候とつゝしんでそおはしけるされは当今第一の宮山のべのしん王春宮に立せ給ひおつつけ御そくみなざるゝに付其方のそくちよのぎゑいぶんになつしきさきにそなへ入内なさしめよとのせんしにて候とあれは直氏とかうのことばもなく扱々有かたきりんげんのおもむき身にあまり大急つ仕候しかし我等しきのぶんざいにてちよくとら申もおそれおほく候へはともかくもきこうの御はからひにまかせ奉り候おふ／＼しんべう成心さし其むねたしかにそもんせんかかねてせんしを下ざるへきそそれ迄ずいぶんつゝしみつれて上落し給へとせんけんつぶさに相のべ給ひちよくしは都（ふし）に上らるゝ直氏ふうふ家のこ郎等こと／＼くはせあつまり是はめでたき御こと

やと上中下に至るまでよろこびあふことかぎりなし（ふし）姫君も今はさすがおもはゆくかゝるうき身のくもの上にいたらんことめうがなやしかしわかみのゑいくわの程はおもはね共一つはぶもかう／＼のためなればあはれゑいりよのかはずして我をめしよせ給はれとしんちうにふかきりうぐわんしぶつじん三ぼうをいのり殊には月天子をねんし給ひ女性の御身にあたはざる大行を成し給ふ（三重）心の内こそしゆせうなれ

扱其後に姫君はしんかうにおよんでひそかにみたちをしのひ出びやうぶか浦のいそに出させ給ひうしほをむすび身をきよめうつわ物に水を入かしらに是をいた(三ウ)たきすみあらしたる山寺のやのむねにあからせ給ひ御月待とそ聞へける十七やより廿三やに至る迄七やが間やのむねにて一足さらずに月かげのいたゞき給ふ水のおもにうつらせ給ふを相待給ふ（三重）きくわんの程こそしゆせうなれすでに廿三やの月ほからかに出させ給ひひかりも水にうつらせ給へば有かたし／＼としんちうにせいはいはん有所に八しゆんはかりの老僧こうぞめのけさころもすいしやうのしゆすをつまくりこつせんとあらはれいかにあこやそれ諸仏の御じひ様々なりといへ共せつする所は無二也爰にしやうと三地のさつた衆生さいとの為くかいにしゆつ生し給ふ然れ共清浄のたいない只今御身か行願殊に心中のせい願こと／＼く仏ほさつ御心にかなへりさるによつてたいないをかり

てやとらせ給ふたんじやうあつて其後は二せじやうじゆのけらくを
 ぬん我は是なん天竺天日みつ経の大祖不空三藏也ごまつとうろいに
 まかせ日本にさいらいす三蔵のきゑんつきぬゆへ今又御みかたいな
 いにやどるそとあとにつけさせ給ひけり姫君むね打さはきこは心得
 ぬ御事や忝もみづからは天子の后に立参らす身にしあればたとへ
 やとし奉る共いかでたんしやう有べきそやおそろしきよと仰ければ
 おふくくさやうに思ふはことほり也去ながら夢くおそるゝ事なか
 れぶつ心のほうべんにてやとらせ給ふ事なれば少もさはりなきぞと
 よ其うへしやば一たんのぬいようにしうちやくしながきみらいをわ
 するゝかや悪世の衆生をみちびかん為なれば今又女人のたいないに
 やとるそや十月が間はぶつほさつの上にかはり日にかはりまもらせ
 給ふゆへによつて少もさはりはさらになしあらははしめの月より
 むまるゝつきのおはり迄十月が間の有様をあらはさんとの給ひて御
 いきふつとぶき給へば忽きん玉とへんしこうろをとびゆきし給へば
 次第くにかたちをへんし月くの□うかくべつにみへけること
 こそふしぎなれ
 まひせめ
 先はじまる月とはつこのかたちないげのましやうをこうぶく有ふだ
 う明王のまもらせ給ふ二月めには七じゆほうじ(四オ)

挿絵第三図(四ウ)
 挿絵第四図(五オ)

井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』



第4図

第3図

ゆをかたとれる花ざらとかたちをへんししゆごふつはしやかむに如
 来三月めには胎内のかたちはいとあらはれて丈珠菩薩の請取扱又
 四月めにはしひ□□たちをひやうし姿はしやくしやう守り菩薩は
 ふけんさつた五月めニははじめて五たい五りんをあらはし空風火水
 地五行方位をさとするぢさう菩薩のしゆこし給ふ扱又六月めにああた
 つてはかたちやうやくうこき出て母のぢさうふをいだくとかや則み
 ろく菩薩の請取給ふ七月のめカには胎内にてかんのやく水をあたへ給
 ふさるによつて一さいの病くをのがるゝ是やくし如来のまもらせ給
 ふゆへ也八月めにはかしらに多なをいたゞきて胎内のふじやうをさ
 くくわんをんさつたの請取給ひこがねのれんだいにいさなげんく
 わに至るべしとおしへ給ふ九月には出生近きゆへによつていじんり
 きをさづけ給ふとくたいせいしの法力也十月めにあたつて十功正が
 くのあかつき仏の成道是ひとしく子帰りはしめて人かいにうまるゝ
 是則あみた如来の方便也有かたや十ヶ月の其間しゆごし給ふ仏菩薩
 皆かんせんにあらはれかやうにはんくやくくにしひの力をそゆ
 る上は夢々おそるゝことなかれと姫君をやのむねよりいざない給ふ
 其後十体のぶつほさつ衆生さいとの直道今也と光明十方にひかりを
 はなつてこくうにあからせ給ひけり弘法大師の御しゆつ生きたい千
 万なか／＼に扱かんせぬものこそなかりけれ

第二

こうしもの出す悪事せんりをはしるならひ姫君くわいにんまし
 ますよしりん国たこうくカかくれなく様々あたにひやうでうしける
 はあさまふししかりける次第也

うかりし年もはや過てあくればほうき五年きのえとらの三月廿一日
 に玉のやう成なんしたんじやうなされける是弘法大師の出生ニ直氏
 大きにおとろき給ひそれを今迄それかしにつゝみけるは何事そ口を
 しや我王わを出てとをからすよすだれときいたつて武家に引うつ
 りむねながらもおくる日の此度あこや姫后に立て入内せば二度で
 ん上の(五ウ)ましはりをもなさばやと心にふかくたのみしにかゝ
 るなんぎをもとむることよつく天めいにつきはてたり定て汝がし
 のひおつとの有べきがよくも思ひかへけるぞや多々あさましき所
 存やといかれる眼に涙をうかめはかみふしをなしておはします姫君かほ
 打あかめ涙にくれてましませしがこはなさけなき仰やなことこそ
 よれみづからかいかでさやうのふきをなし申さん此比かねて申せし
 ごとく此子は只人にあらすたとへいか程のゑいぐわをもとむればと
 てしやばのゑいくわはでん光せき火のことく有かとみへてたのまれ
 ずなかきみらいのたのしみを此わかゆへにたすかり給へ仏のおしへ
 をおろかに思召るゝことかへす／＼もうらめしやと思ひ入てぞ申さ

るゝ直氏いよ／＼りつふく有やあいはれぬ汝がいさめごとやされば
天地うるのめぐみをもつて草木もおいでせいで長すまつそのごとく
人間もいんやうわかうのだうりによつて人と生すなんぞ是を人しら
んや天子のりんけんをそむきおやの心をまとはす程のおこのもの子
にてはなふてかたき成をしらであひせし口をしやみれはなか／＼腹
立に打てすてんとの給へばみだいあはてゝすがり付なふなげなや
直氏殿たとへいかやうのこと有とて御手打とは何事ぞひらさらめ
んし給はれと涙ながらにの給へはおろか成いひごとやそれ人として
出世をしらぬはちくしやうにもなをおとれり是か女の道なるかゑゝ
もとかしやはなし給へとふりきり／＼出給ふみだいなをもかなしと
て御ふくりうはことはりなれ共さすがおんあいのすてがたくふひん
に思ひ候へば命をたすけてたひ給へこんじやうごしやうのかんどう
そやはや立出よあこや姫とむたいにへたて給ひつゝおおくに入せ給ひ
けりせんかたなくも姫君は涙ながらに声を上我身にあやまりなき物
を是は仏のおしへにてかりにわらはが胎内にやとらせ給ふ御こと也
すへのやみぢをあきらけくてらせ給はん有がたさにしゆだいのこ
とをも打わすれけいやく申せしゆへにこそ心やすくだんしやう有し
にあしく聞召るゝ事よとくときなげかせ給へ共こととふ物もあらさ
れは涙ながらにわか君を御ふところにてはりなく／＼まよひ出給
ふ心の内こそあはれなれ

井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』

いつ又君かたまきかにあゆみならはぬくる(六才)土をかちやはた
しのふせいにたどりまよはせ給ひけりいづくをそことはしらね共
君かや千代のまつがうらとまりのいそと聞かからに我はいつしか今出
て帰らんことはかたいとのきればたりし親子のゑん仏のをしへと
いひなからあゝなげななきゑんやとなげかせ給ふぞあはれ成かゝ
りける所にいつみの国まきのをのこんぞうくわしや^うは此所を通
らせ給ふかあれにようにの声として御経どくじゆの聞へけるこそふ
しきなれいか様只物にてはよもあらしとみづからあたりへ立よらせ
給ひ姫君の有様をつく／＼と御らんして御身はいか成御方なれば其
子をいざない給ふそやゆへをきかんと仰けりさん候みづからは当所
佐伯の侍従直氏と申物の娘あこやと申物にて候が仏のおしへまし
／＼て此わかをくわいにんいたし月をへてたんじやう有しに身をい
たつらになすゆへそとておやのふけうをかうふり候とかく思ひのた
ねといひ其うへかやうになき出してはなきやむひまも候はず所せん
このうみへしづめんとそんなしきつて候へ共おんあひのすてかたくと
ほうもあらぬみづからをふびんとおほしめされよと又きへ入てなき
給ふ

こんぞう聞召誠にきみやうの物語うたかふ所もなく是はこんじやの
けしんなるへしいさなげ／＼との給ふは是皆御経どくじゆの声也し
つめんこともつたいなしそれかし申請てよういくせんいかに／＼と

仰ければ姫君あまりのうれしさに扱ふて忝かなせん方なさにぞしつ
めんと思ひしにひとへにふかき御じひやさあらは參らせ申さん是は
又此わかくけいづの巻物にて候へばせいじんいたし其後に此子にと
らせて給はり候へいよくたのみ候と涙なみだなからに渡さるゝわしやう
も共にらくるい有いかぞ多おほなりよに存たもべきとたかいにいとまをこ
ひこはれままきのをさしてぞ帰らるゝ

あこやうれしく思召此うへはぶもの御前を何とぞ申なをさんと立帰
らんとし給ひしかさすがきらねぬおんあひの思ひいつれはかなしく
てなふ其子はやかましき子にて有はかへしてたべや御僧とよへとさ



第5図

けべとかいそなき今は心もみだれがみ何国迄もおつかけて取かへさ
んと思ひ立くるひ出させ給ひけり心こころの内こそ哀なれ
是は扱ふおきごんそうわしやうはまきのかはら帰らせ給ひわか君をよ
ういく有きのふけふとは(六ウ)

挿絵第五図(七オ)

いひなから十四年の春秋をこへ則御名を金玉丸と付させ給ふもとよ
り権者のことなれ一じを聞て千字をさとり給ふじちうの人は申に及
ずよの人こそつてたつとみけ^〇是こそ文殊菩薩の御けしんぞと師
はかへつて弟子をはいしなをしもおこたり給ふなといさめ給へは金
玉はいよくはげみ給ひけりかく所のゆかにうつらせ給ひ御持念の
折からつくく思召す様は何とぞこのみをこらしめくはん行をつと
め^〇のんと思ひ立せ給ひあたり近き里ののさんまいむゑんのびよう所を
めくらせけるこそしゆせうなれ

はかにもなればつかのうにあんさしてぶつしんひみつの正りをか
んがへつけつかふぎにてみだるゝことなくつとめ給ふそ有かたきかゝる
所にたれとはしらず人おとしきりに聞へしがさき成ものゝいひける
は扱ふ此比はめつらしきなくさみもなくとぜんさよとぞ申ける次成
おのこのいひけるはいやのふそれがしはかはりたる事をみ付たりと
しの比十四五なるちごまいよ此はか原にてくはん念するとみへたり
いさや是を尋ね出し引さきくはんと申けり有あぶ物共かしらを打て

悦びそれこそくつきやうのなくさみ也いざ打立といふまゝに一同にはらりと立て爰かしこを尋ねしか金玉丸をみ付すはや是こそ件のちごよわれとらんとたれとらんとあらそひける其時金玉ちつ共おとろき給はず大いとくの法をくはん念有心をすまし給ひければ有かたや明王かんぜんにはあらはれ金玉をしゆごし給へはおほくのましやうおそれをなすゝみかねてそみへにけるさき成物のいひけるは扱々につくいあの児や此うへは山中の庄司正つら殿うばこそをいそいでよひて来れやといふかと思へは六十計のうばてをひかれて有し所へ立こへやあ何事ぞかたゝさん候めつらしき肴をもとめ候へ共なかゝてむかい仕りあたりへ我等を近付ず候て何共ほうきやく仕りそれゆへ使を立て候おふゝそれはおもしろしさあらば是へつかみよせん方ゝ是にてさいなみ給へ畏て候と手ぐすみて待いたり其時件のうば大はんじやくの様成うでをぬかゝとさしのぼしつかみよせんとはけみしはすさまじかりける次第也

され共金玉少もおそれ給はすくじをきりてかけ給へはたちまち五たいますくんでは(七ウ)たらかず大ぢへかつはとたをれふしやれかなしや何とぞしてつれてかへれや汝らと大おん上てぞおめきけるくみての物共きもけししいぎやういるいのかたちをあらはし前後をかこみかたに引かけ行方しらずに也にけり然れ共金玉は少もみだるゝ心なく定而只今のやつばらはけしやうの物とおほへたり山中の庄司

は聞及ひたる人なるかひつちやうまどはしけるにうたがいなし是こそ弘法のいりきなれば行てことをためさんとたなびく空を待侘て庄司がもとへぞいそかるゝ

屋形になれば正つらにたいめんし是はまきのをの金玉丸と申物にて候ごへんの老母ばおそろしきへんげの物にて候ぞゆだんし給ふな正つら殿とぞ仰ける庄司大きにおとろき近比れうじを仰らるゝ物かな父にはようせうにてはなれ只一人の老母なれば身にかへこうをつくす所になんぞ跡方もなきそらことちつとしんくわいにぞんし候へ共しやくはいなればめんし申お帰りあれとたゝんとするを引とゝめよしなく我をうたがひ給ふ物かなさあ只今めのまへに其しやうたいをあらはし申さんそれがしか声をきくならば女にけうせ申さんしかと手ごめにしたまへともなけにの給へは庄司も今はせん方なくもしちがふ事あらはゆるし申さぬぞおかくこあれあふゝいかやう共はからひ給へと忍ひをくに立入給へはあんのことくくたんのうばおびたゝしキ有様にて女房達にてあしをさすらせ大おん上てうめきけり其時金玉つつと出やあめづらしやうばこそさぞいたみ申さん出ゝくつうをはらせ申さんと立より給へは件のうばなふおそろしや正つらといふかと思へは其姿あつきとあらはれこくうにとんでゆかんとするを金玉すがつてひきとゞめおのれまじやうのふんとして人間をたふらかしことに弘法をさまたくること其とがいかでのかれ

んと引ふせ給へばなざけなやゆるし給へかさねて御みの仏法をまもるべしとひかへし袖を引きつてこくうにとんで行所を正さつらすかさすてうと切切きりぎりれて少ひるむ所をたゞみかけてける程に何かはもつてたまるへき取ておさへとゞめをさしゑゝおやのかたきかうらめしやと涙ながらにさしとをしゝゝあゝ有かたの御をしへ先々こなたへくゝとおくにしやうじ奉る金玉丸の御有様又(八才)正つらのしんていことほりせめて尤やと扱かんせぬものこそなかりけれ

第三

光るんやのこたく月日にせきのあらされは金玉御年十七才にて御出家有則御名を空海とつかせ給ひしやみの十かい七十二のいぎをさづかり五大明王能まんこくうざうの法ことく成就有てどつこの観は御むねの内に明らめ八ふのりはしたのしになめらか也今にははや御心にかゝることもなくおこなひすまし給ひしかそれより国々御しゆ行有やまとの国くめの道場にて諸天のつげによつて大日経を多給ひはいらん有日本において此経のぎりをしる人なし此上は遠く仏所を尋求法せんと思し召入たうど天の御心ざしあさからず仏神三ぼうにさせい有ふうはのなんをかぢし給ふ有がたかりける次第也
是は扱置爰にあはれをとゞめしはさいきの侍従直氏殿にて殊にあはれをとゞめたりいつしか国を召上られたかふけんぞくおちうせて

あこや姫の妹にみさぎ御せんと申せしかかうくの心さしふかく年おひ給ふ父上をはごくみ給ふそあはれなるいたはしや直氏はいか成しゆくせにや両かんつぶれもうもくとならせ給ひいよゝ万事实よりなくあけくれなけかせ給ふにそ御心ち常ならずよにくるしけにみへにけり何とぞしてしよくしを少々参らせ度候へ共其便とてあらはこそ此上はみづから里へ参り何とぞようい致つゝ追付帰り申さんと涙ながらにの給へいたはしや直氏くるしけ成いきをつぎあゝいらざることよみささ(まきカ)のまへ今はしよくしも望になしひらにむようとの給へはいやく少聞召すならば御きしよくもなをり申さんかつうは



第6図

わらはが念なればしばらくまたせ給へやとなげきながらに庵を出袖
こい出給ふ心の内こそ哀なれ

すてに其日もくれ過て五かうの天もひらくれ共みさき帰り給はねば
いよ／＼待わび給ひつゝくときなげかせ給ひけりむざんやなみさき
のまへ我ゆへすかたをやつしはてあらぬ手わざに心をつくしはごく
みかねて今迄も帰りもやらで有けるはふびんの者の心ねやあゝ口お
しや程にくるしくてはもはやおはるに程はあらしはや／＼帰りて
今一ど（八ウ）

挿絵第六図（九オ）

声也共きかせぬかあら悲しのみさきのまへとなげゝ共涙なくさげべ
と声の出ばこそはやこときればはて給ふ共□□切られやおんあひの
まうしうのきづな切れやらすおち入かぬさせ給ひけり

かゝる哀の折ふしくうかいは入唐渡天の望にて都を出てはる／＼と
九国のちを心かけ下らせ給ふ折から此所を通らせ給ひ直氏のくるし
け成共声をつく／＼と聞召哀さこつずいにてつし扱ゝふびんのこ
と共やと庵のあたりへ立よらせ給ひことのやうすをみ給ふに六十計
の男のやせおとろへて便なくはんしはん生の有様に前後ふかくにみ
へにけり空海やかて庵の内へ入せ給ひかに病人我は是諸國しゆ行
のしやもん成か汝がていをみるに其まゝすぎんやうもなく是迄立入
申そとあらひよねをとり出させ給ひ口中に入給ふその時病人くるし

げにいきをつき扱はしゆ行の御出家様にてましますかあら有かたの
御りやくやな御らん候ごとくかゝるふじやうの庵の内へ申いるゝも
おそれあれ誠に某もいにしへは少ゆへ有身なれ共いつしかかやうに
おとろへあまつさへ去年の秋女房にもおくれ只一人の姫を持て候が
まづしくしてくらすがあさましさに何とぞしよくしをあたゑんとき
のふよりいとなみに罷出いまだ帰り申さす候此者をふびんに存心に
かゝり候ひしが只今に至ては思ひ置事も候はずかゝるたつとき御僧
様に相奉ることさいわいなれりんじうの一刻をさづけさせ給ひ候へ
大じ大ひの御僧様と手を合てそなく計空海聞召あふ／＼やすき間の
ことよそれじよくあくのぼんぶわうじやうの直道はなむあみた仏に
きはまれり仏の本願のあふぎ念仏を申されよなむあみた仏とすゝめ
給へはあら有かたやたすけ給へなむあみた仏／＼の声共にもろ／＼
のくつうなくぜんしやうに入かごとく終にむなしく成給ふ

然る所へみさきのまへかくとは夢にもしろし召れすなふ父上様只今
帰り候そやさぞ待かねさせ給はんと庵に入らせ給ひければ空海御ら
んしてやあ汝か父ははや相はててありけるは何とておそくは帰りけ
るぞなふそれは誠かかなしやと思はすしゝずいたき付なふ父上様父
うへとよへとさけへとかいぞなき是は／＼と計にてしはしきへ入給
ひけりやう／＼涙をおしとゝめさぞや最後にみづ（九ウ）からを待
わひうらみ給ふへし母上様はつかれてより天共地共父上を頼にかけ

てはごくみし其かひなくて今わの時^(さか)側ことはをもかはさずして其まゝわかれしうき思ひ何とはらたんうらめしや情なや父うへ様今一度みさきのまへかことばをかけて給はれともだへこかれてなき給ふしよしの哀と聞へけり空海もふしきの縁に立よりてかゝる哀をみるこよげに道理也ことはりやと衣の袖をそしほらるゝ姫君涙のひまよりも御僧様は終にみなれぬ御方成は是に御入ましゝて情有けにみへ給ふいか成御方にて渡らせ給ふぞ有かたさよとの給へはあふ某は諸国渡僧の折からおもはずも爰に來てかやうの人にけつゑんをなす事我も一しほまんぞくせりとりんしうの次第一ゝに語らせ給ひ共に涙をなかせ給ひつゝして其方のしんるい多るいとでもあらざるかさん候かやうの体に成果候へはしんるいしたしき者とても候はずとも御僧の御しひにかけをかくして給はれと涙ながらにの給へはあふゝやすき間のこそそかしさあらはとふらひ多させんとみづからもよくなされ御衣をぬかせ給ひもうしやにきせ給ひやりとに打のせ給ひつゝさきを空海かき給へは跡をみさきぞかきにけるけにやしたしきおうちやまこ又はげんざいおばやおい其内縁をしらすしてのべに出させ給ひける心の内こそ哀なれ

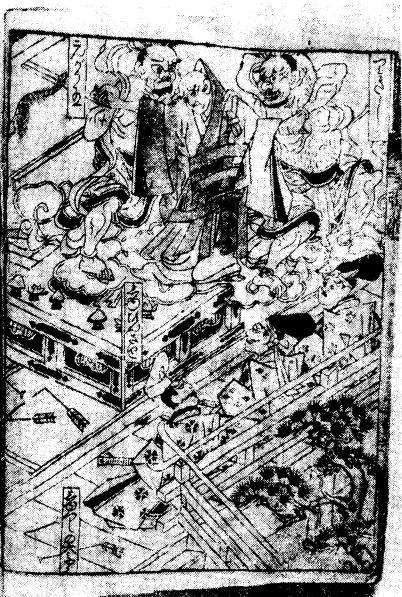
む所にもなれは空海草木をかきあつめしがいをいたはりむじやうのけふりとなし給ふむさん成かな姫君けふりのすへを打詠め便なや今迄はざり共とこそ思ひしにかゝる事にみなしてわらはゝ何と成べ

きぞ誠に人間の身のはて程定かたきことはなしみづから父上も元来いやしきしつにもあらずさぬきの国の大将さいきの侍従直氏とて其名を多たる人也しいつしかかやうにおとろへはて行多もしらぬ御僧様の大じ大ひに預りてやうゝすがたをかくしてあれもしさもなくはいかゞせん有がたしとうとやと手を合てそなき給ふ空海聞召何と候只今の往生人はさいきの侍従どのとなして又直氏はいか成ゆへにかくはなりはて給ひて候されは申もはつかしく候へ共此上なれば語申さん父上其身のゑいくわ他門にみち子をば二人持れて候わらばが(十才)あね上はあこや姫と申てかくれなきびじんにて其なみかとのゑいふんにたつし後に立せ給ふへきとせんし度々かさなりしに思ひもよらぬ仏の御つげ有て十六才の春の比くわい人有玉のやう成なんしをまうけさせ給ひければうきなほよみに立くもの上ひとの評定にもかくては入内かなはしと父上の身の上迄ちよつかんをかうむり給ひいつしか国を召上られかやうの体に也はて候哀と思召さずやとくとき立てぞなき給ふ空海夢の心ちして今ほうたかう所なし我こそ其あこや姫の胎内にやどりたり金玉丸といふ者よ是ゝさいきの家のけいづの巻物是に有おうぢご様にてましますかさいぜんよりかくと夢にもしるならはいか計うれしからん思へはゝざりとはいとおしの御有様やとなげかせ給ふぞ哀なる姫君も偏に夢の心ちにて扱はさやうにましますかなふ御身様の母うへはわらはか為には姉君

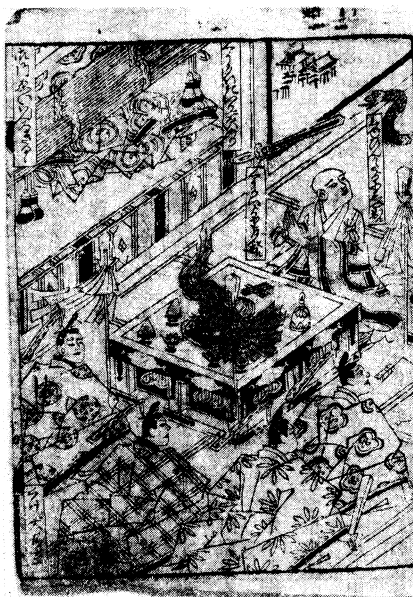
よ其方くわいにん有し故ふけうをかうむり給ひつゝそれよりか程に
行衛もなし父上母上もりに皆あさましく也(うか)はて給ふ是は御身ゆへ
ならずあね君もおや達もかへさせ給へうらめしやとすがりついてぞ
なき給ふせん方なくも空海は涙にむせひの給ふやう御なけきは断や
まことに某が身の上程つたなかりしことはなし我出生せずはかゝる
思ひはよもあらし是皆しやばのならひなれはいよ／＼出家さうぞく
して衆生さいとのぜんごんをもつて此がういんのかるへし御身を
ともなひ申度候へ共我は求法の其為に入唐渡天いたす也然はいざな
ひもせんなし此上はさいきの家のけいつの巻物を其方へ送り申さん
是よりすぐに都へ上り大なこん定をききやうのみたちへ行きに頼
給ふべし某が大たんなにて候まゝ心みそたて給はるべしとことこ
まかに書中をあそはし姫君に渡し給へばみさき夢共わきまへすうら
みながらも御身様を便にぞんし候所に又そやはなれ申なばなをうき
ことのかさなりていかで都へ上り申さん此うへはかみをそり後世の
つとめをいたし申さんかみをそりて給はれと恨みなげかせ給ひけり
空海きこし召おろか成仰やな此巻物をむぎ／＼とたへさんと思召す
かや我は此事のなれは思ふにかひも候はずさだ(十ウ)をき卿を
頼給ひ此巻物を御渡し候はんいかでそりやくにもてなし給はんひら
に／＼と様々いさめ給ひければせん方なくも姫君は巻物書中を請取
てもはやわかれ申さんか随分御けんこに追付きてうましませやあふ

其方にも只身をまつとうぶいにして某かきてうを待給へしかしむじ
やうのよのならひあふはわかれのうき世やと又さめ／＼とそなき給
ふ涙のわかれぞ哀なるわかれ／＼になり給ふ

扱其後に空海はつくしなるふせんのうさにぞ付給ふ空海思召すやう
は当社八まん大菩薩は日本国中のちんじゆ殊にれいけんあらたなる
御神にてましませは此度の渡海なみちはるけき舟ちなれは願成就の
き願のなさんと神前にひさまつきしんごんひみつの法施を奉りふう
はあんおんぐほう成就とふかくきせいをかけ給ひねがはくは八まん
大菩薩正身の御姿を我らにおがませたひ給へと一心にきせい有念比
にどつきやうひまもなし然る折ふし内ちんよりあてきよらか成女郎
のさもよは／＼と立出てにつことわらひおはします空海御らんして
いや／＼さやうの御すかたにて一天のちんじゆとはおがまれすと一
心にくは念念あれは内ちん俄にしんとうし十天の悪鬼あらはれて
つちやうをつえにつきあたりをにらんで立たりしはすさまじかりけ
る次第也空海猶もちい給はすおろか成有様やじげん大菩薩と御た
くせん有大し大ひのそんきやうをいかてさやうにおかむべき誠かな
はぬ物ならば某か一めいをとらせ給へとたんせいをぬきんでゝひる
むけしきはなかりけり其時内ちんひかりかゝやき光明かくやくとし
てなむあみだ仏の六字の名号一／＼の字に光りくわんをはなつておかれ
給ふ空海有かたく是こそ誠の御真体よとなな心を合せなむあみだ仏



第7図



第8図

みた仏と一心にせう念あれは山のは出る月のことくたちまぢあみ
 〔下〕如来のそんそうあざやかにうつり替らせ給ひつゝ入せ給へは空
 海かんるいきもにめいし願成就とくはん念有
 それより御しん前を下向有入唐渡天ましくてけいくわわしやうに
 たいめん有しんこんひみつのおうきをきはめ年月程をへてきてう有
 空海の御法力有難し共中く申計はなかりけり(十一才)

挿絵第七図(十一ウ)

挿絵第八図(十二オ)

第四

かくて其後空海わしやうは入唐渡天ましくてけいくはおしやうの
 座下につらなりしんごんひみつのおくきをさつかりもんじゆのじや
 うどに至つては一代経のふしんをはらし年月をへてきてうあれは上
 一じんより下万民に至迄^{ふし}そんきやう有こそしゆせうなれ
 其比九条の東西にがらんをこんりうし給ひて東寺西寺と名付則東寺
 を空海にくたされ西寺をしゆびんに下され天下あんせんの御きたう
 所と定らるゝされは過し入唐の折からみまさかの国にてたいめん有
 しこはくほみさき御せん都にのぼらせ給ひ家のけいづをあらはし則
 定をき卿の室家にそなわり給ひ御ふうふ共にさんけい有けにやたか
 いの御悦ひたとへていわん方もなし是に付ても空海は御母上の御行

衛あけくれこかれ給へ共みかとよりのせんしにて少もいとまあらすして御心をくたき給ひける定おき御もみさき御前をあなたこなたへ人をつかはし御行を尋ね給ふつたなかりけるきん也

是は扱置其比又しゆびんそうづとてちとくゆめうの御僧有元来てん

のかいしにて其なばん天にかゝやきしか空海きてうのいこほういを空海にこへられむねんにちやに越過して悪心を作らるる心の内こそ

はかなけれ有時てしたちを召れ扱も某すでに天子のしはんとして天下のいのりをなす所にいつしか空海にこへられむねんといふもあま

り有此うへはばんしう法くわ山に至てひそかに空海をてうふくして忽命を取べき也汝らもすいぶん願行おこたる事なかれとしのひく

に都を出ほうくわさんへぞ参らるゝ

道行 是は扱置爰にあはれをとゞめしは空海の御母うへあこやござん

のみの上にてことにあはれをとゞめたりまたちの内よりはなれ

給ひわかぎみを。こひしさまさる思ひくさはすへの露の命もぎへや

らでいよゝ心きやうらんし四こくのちはいふに及す九国にわた

にあいたけのつえはしら共たのむべきおいの山なはるくとこ

へて。そなたを詠れはきのじのとをやまきりふかく恋しゆかしき

我こは扱いか成ゆへにか程迄しけくは物をおもはするぞや今はふ

つつと思ふましあら思ふましおもはしといふこもすま涙こ袖に

あまれる露かあらぬか。しれにぬれてほすひをわかぬうらめしや

行ば程なくあまべもの立かさなれるよの月ほのくみれば有どを

しのみやい久しきかみかきのあけのどりをゆんでみてきくもう

れしき大とりや爰はうきよのさいかやいつくよりなをすみよしの

まつの村立はるゝと打詠つゝ行そらのなにはいり多のよしあしや

すぐれはすまやあかしがたしほいふしあまのそてそしぼるゝ我に

なぞらへあはれ也はりまの国に入ぬればなを思ひますいなみのやの

なかのしみづにかげをうつせばのふやつれはてたるわがすかたあは

れ我子に今一どあひみられればやざりともとねがふ心もみだれはてひ

とをうらやみ身をかこちなくより外のことぞなき

かゝりける所にしゆびんそうづはほうくわさんへ参られしがあこや

やがてはしりよつてなふ御そう様わらわが尋る子の行急しろしめさ

すやおしへてたべと申さるゝしてなんち尋る子のなは何と申けるぞ

さん候いまだ赤子のうちより人にやしなはせ申ゆへなは何共ぞんぜ

のしれ申さんぎやうじんとてあさましやと一とにとつとそわらはれけるあこや聞召おろかの御僧のいひ事やしらねばこそ尋るなれぬ口をしや我はさいきのなにかしにてすてに召にそなはるへきせんしを請て有けれ共其子ゆへにこそかやうになりはてたれあら恋しのか子やとないつわらふつやすからすく^{ふし}るひ給ふそ哀なるしゆひん聞召いかに汝ら只今あきのやうちよのいひつる事をきい^やさるかうたか

ひもなきは空海がごとにて有てんのおしへこゝ(十三才)也某とふしさい有とおもてをやはらげ立むかいかにきやうちよ御身の尋ね給ふは空海房の事にてあらんおふ其空海よゝとうさい子の其時

□つみのまきのをこんぞうおしやうと申人に参らせて候かそれはいつくに候ぞ合せてたへとそ申さるゝしゆびん聞召扱ゝいたはしや

さればかの空海は出家なりておごりつよく御みのことをほの^めかしてみくるしき物をおやなとゝてたいめんもよしなし我はもとよ

りおやもなしとみつ^{「か脱力」}らに申されしがおやにふかうの其とがにやにはかにてんしのちよつかんをかうふりもろこしへなかされたり命のう

ちにあはん事思ひもよらず候と誠しやかに申さるゝ女心のはかなさはきやうしんといひ折あしく聞よりいか成しんいのほのほけふりに

むせぶくるしみになをしもくもる心の月出ゝ思ひしらせんあゝにくや空海腹立やおのれかしゆつしやう有しゆへわらはをはじめ父母

迄かくろとうにさまよふは皆々汝がわぎならずやそれにわらはをう

とみはて天ばついかでのがれんやたとへはたいたる天竺までも尋行てたいめんし今のうらみをはらざんといかれるかたち其まゝこくうにとんて出られしは^{ふし}すさまじかりける次第也しゆひん大悦かきりなく今はあらかしめ本望はとけたり此上は都にのぼり空海をもおのれとじめつをとけさせんと悦びいさみ帰らるゝ心の内こそあさまし^{三重}けれ

是は扱置其比大うちにはけつけいうんかくをはしめ東寺西寺の両僧を召よせられ御まへにだんをかさらせみすたかくまき上させ清涼殿

にしゆつきよ有て御心ち常ならずいふんほうりきをもつて御へいゆふのかち有べきとのせんし也是はしゆひん空海互にいせいをあ

らふそゆへさう方の行力をゑいらん有べきとの御事とそ聞へけるかくてしゆひんはちよくにしたかつて我におとらぬでし^{「達力」}奉十四人召

つられれ□□さんだいしだん上にあがり給へば空海も御てしあまた御供にて是もおなしくさんだい有だん上に上らせ給ひしゆずさ

らゝとをしもんでそくさいゑんめいゆいしよさいなんとふかくちかはせ給ふしゆびんはいかれる心ふかくこなうのゆうの祈願はなく

て空海をてうぶくあるこそおそろしけれこんがうどうしの法をおこなひ一じ金りん五たんの(十三ウ)法又空海は六じかりん八じゑん

めいふげんの法こまのけふり御所にみちれいのおとすさましく身のけもよだつ計也しゆびんかんたんをくだきくじやく明王をふうしし

きりにいのり給ひければどくやこくうにみちく／＼て空海のだんの上にあめのごとくにふりかゝるされ共空海少もさはぎ給はず持せ給ひし扇にてあなたこなたへはらいすてみだの名号をとなへ給ふしゆびんいらつてじゆずふり上空海になげ付給へは此しゆず忽しやうじやとなつてうごころ（うごころ）を立てとんでかゝる其時空海持せ給ひしとつこをなけ給へはとつこ其まゝりけんと也件のしやうじやにわたりあひあらそひけるこそふしきなれされ共せうしやいかりをなしかのりけんをのまんとす空海ごしんほうをもつてかのせうしやをふうし給へはかのりけんにとまひきてあへなくかたちほうせにけりかゝる所にこくう俄にどうようしこんかうりきしの二王あらわれしゆびんを取てだんよりおとし是こそふつ法わう法のたいきなれ空海まさにせんしにしたがひ御しゆ命長をんといのるに此法師は空海をねたみ様（ま）ぶくいたせし也され共仏菩薩のかごにあつかり其身になんはさらになししたがへよとの仏ちよくにまかせ是迄あらはれきたれりとしゆびんを中に引立（ひ）くもゑはるかに上りけりみかどをはしめ公家大臣いづれもきいの思ひをなししどにあつとぞかんし給ふ其声しはしなりもやまさりけりみかど多いかんあさからずいよ／＼一天ちんごのいのりおこたり給ふなとみすの外にしゆつぎよ有左大臣たもろこうを召れなひく／＼空海紀州高野山にからんこんりうの大願有よしいそきかのちをあたへがらんをざうりう（う）有べ

きとのみことのりこそ有かたけれ空海大悦かきりなく忝なしとちよくたうし大山を引ならし大塔こんどう残りなくきんぎんるりをちりばめことく造立有今のかうやこんかうぶしは是にて有きたいのためし是なるはと扱かんせぬものこそなかりけれ

第五

扱其後へんしやうこんかう空海和尚法力ふつ心にかなひけるにや様々のきすいあきらけく國々山々むら里をわか（十四才）

挿絵第九図（十四ウ）

挿絵第十図（十五オ）

たず仏かくがらんを建立し給ひ御母上を初め六しん法かいの為九条の東寺において俗縁（う）くはんでうを取行ひ給ふだんなは大なごん定おき卿并にみさき御せん其外大内の上郎達扱又諸法のあき人我もく（三）とさんけい有くはんちやう打こそ有かたけれ

かくて空海らいはんに上らせ給ひさんけいのくんしゆに打向い給ひ扱も某此度のさせんのきはおやおうちのぼたいの為也それゆへかやうにけち縁をなさしむるされはしやばはむ常也けふ有てあすを□すすへく（ほ）たいしんのふかき方く／＼に縁むすふ為なればみつからゑぞうをきさみかいげんくやうをとけたり扱み給へ人々ととひらをひらきとちやうを上させ給ひければきせんくんしゆの參詣の人々一（三）



第10図

第9図

どにあつとかうべをたれらせ□□声しばしやまざりけり

其時定おき卿空海に打向ひ某いか成宿かうにやみそしになれ共子を
持す何とそ御方便にて一子をさつつけ給はれとふろ共手に合涙
をなかしの給へは空海聞召さやうに思召さば殺生をふつとやませ給
ふへし殺生の業深きゆへ御子は更になかりし也是へ此御札をしん
しよの上におし給へと真言ひみつの御札を下されけりおしへのごと
く月をへずしくわいにん有たまのやう成なんしをまふけ給ふ是ひと
へに空海の御法力とぞ聞へける

扱其後にみさき御せん一つのじゆ文を捧給ふへんせうこんがう請
取給ひたからかによませ給ふ其しゆ文にはく東天にかゝやく月も
早西山にかゝる人間でん光の有様あやまつて三づ八なんの悪趣をの
かれず時に至て弔ふれいこんはじをん広大の父也計さるにおとろへ
御最期の時さへことはをかさはさす其さん念今にはれすあふきねかは
くは只今心ざしの真実に答て忽上品れんだいにいたらしめ給へとよ
み上給ふ空海涙をうかめ給ひければせ方其外參詣の老若男女皆たん
せいをぬきんて、即身成仏とゑかう有こそしゆせうなれ其時ふしき
や紫くも雲上にみちく／＼て有がたや直氏はひぎやうのうん上にのり
給ひらいらいん有こそ有かたけれ誠にたへなる御帛ひのくりきまさ
にあらはれ直氏うん上に立上り御手を合せへんじやう和尚を押し給ひ
いかに空海其現在に様々のなんくを請しを命おはつて此きをさとる

御身は浄土三地の菩薩衆生さいどの為出生あるしを^{「ま」}しらておや子共につ（十五ウ）らくあたりおい出したるとかによつて浅ましくおちふれさま／＼のくげんにあいしがされ共ちくのゑんあるにやりんしう正念にてあみだ仏の本願にじやうし極楽往生いたす也有かたきよとぞ仰ける空海和尚をはしめ大なこん定をき卿みさき御せん其外参詣のくんしゆ扱々有かたき御利やくやと共に一れんたくしやうの結縁にあつからんと皆念仏をぞ申ける

空海なゝめに思召たのもしや／＼といよ／＼大日ちゝおうのひみつ
の巻をくはん念有かゝりける所にこくうにはかにしんどうしてみ
てらもこくうにさかのほるか^{ふし}と皆たましいをうしないけり其時空海
つつ立あがりいかに参詣の人々かならずさはぎ給ふな是は某か母上
あこや御せんのぼうしんあらはれよこしまに我をはらみかやうにあ
たをなし給ふとみへたりいて仏法のきすいをあらはし甲申さんと
こくうにむかい手を合しはらくくわん念ましませは其時こくうに声
あつておろか也空海汝出生して今げんざいに結縁をなすも是なにゆ
へそみつかからか厚恩ふかきゆへならずやそれになんぞや我をうとみ
もろこしへ渡りける此恨み生々世々に至る迄いかてわすれんぬぐり
あふこそさいわいなれ思ひしらすや思ひしれとよははる声ともろ共
にはたひろの大じやあらはれくれないのしたをふり立こずへをつた
ひし其ふざい^{三重}すさまじかりける次第也こすへにしはらくやすらひて

いかれるけしきおそろしやされ共空海手を合せおろか成御ことはや
四おんの内にわけてふかきはぶものおんいかでそりやくに存べきに
やゝうもんぼうしやむ一ぶ成仏のやうもんを眼にかけ光明しんごん
二百余遍浄のすかた^{「符字九」}すかたとへんしておかまれ給ふそ有かたきけに
やだこくの罪人も光明しんごんのくりききに^{「つゝ」}そく座にくげんのか
れけり有かたや直氏もあこや姫もそくしん成仏まし／＼てかんせん
に光^{「ま」}りをはなつて東西にとひさり給ふこんがうさつたひみつのしん
ごん仏法はんじやうめてたし共なか／＼申計はなかりけり